

こだわり

吉井 有希恵

弟夫婦と家計が話題になった時、弟は妻の厳密な節約ぶりを語った。ガス使用の上限額を決めて、毎日メーターを確認しながら使うくらいだという。

二人は、長年共働きをしており、妻が忙しい時には、弟は台所に立つのをいとわない。彼女は、水の節約にもこだわり、弟が「皿を洗うのに、水の流しっぱなしを注意されるんだ」という。私の洗い方も同じなので、分の悪い流れになったなと思っていた。

ところが、彼女はバラ作りが趣味なので「特に夏の間は、何十もの鉢に、毎朝、たつぷりと水やりをするんだ。僕の水の使用量なんかわずかでしょ」と弟は笑った。

私にもたくさんのこだわりがある。その一つは清潔。清潔になった洗濯物を扱う時は、手術前の外科医の様に、石鹸で洗った両手を宙に向けて、何にも触れないようにしてやる。だから、干したり取り入れたりを、家族のだれにも頼めない。

そんなやり方に突っ込みを入れるのは、基本おおざっぱな長女だ。「台所のタオルがいつもびしょびしょじゃない。見えないカビが一杯だよ」。解決策が分からず、見ないことにしていたのだけど、その通りだった。

私の次のこだわりは、できるだけ加工食品を使わないこと。どの店にも、冷凍食品やインスタント食品に加えて、ドレッシングやソ

ースなどの調味料も数知れない既製品が溢れている。多彩な食生活を楽しむのは良いことだし、働く母親たちには、大いに味方になっているに違いない。

これまで私たち、多くの高齢の人たちは、加工食品には頼らずおいしい物を作ってきた。自然な食品にこだわるのは普通のことでもある。加工食品は、添加物や栄養面、また環境的な問題も小さくない。

しかし、自然の素材だけで、いつもおいしい料理を作るということは簡単ではない。だから「スープの素」や「出し汁の素」には負けそうになる。特にドレッシングのおいしさには脱帽だ。

ある日、孫のためにおにぎりを作ろうとしていると、「お母さん、味付けノリより焼きノリの方が自然だよ」と注文を付けたのは、私以上のこだわり人間の次女だった。味付けノリはいつも家にあり、それが加工食品とは思いつかなかった。

私のこだわりはいい加減だ。そして、こだわりは皆それぞれだ。いい加減であっても、おかしいものであっても、たぶん家族のために良いことと思いついて、積み重ねてきたのだろう。

誰のこだわりも褒めてやってもいい。

作者 吉井有希恵

題名 こだわり

山陽新聞夕刊

2020.03.05 掲載